

# 小学校教育課程の表現活動における教科間連携に関する研究 — 「音が見える作品」の創作授業をたよりに—

飯島 淳<sup>1)</sup> 横須賀 恵<sup>2)</sup>

NPO 法人企業教育研究会<sup>1)</sup> 東京学芸大学附属小金井小学校<sup>2)</sup>

本稿は、小学校教育課程における音楽科と図画工作科の教科間連携授業の実践報告である。表現領域の活動として音楽科と図画工作科では目的や指導内容に共通するところが少なくない。今回、筆者らが小学校第4学年を対象として構想・実践した授業は、「音さがし」と「音づくり」を内包した「造型遊び」そして制作された作品を用いた「音楽づくり」である。作品の制作過程においては環境整備と指導者の充実を図り、図画工作科の専科教員やゲスト講師の専門性を取り入れながら図工室で実施した。実践の結果、2教科間にまたがる「音さがし」「音づくり」「造型遊び」「音楽づくり」という4つの表現活動に有機的な連続性が生まれ、活動中の児童の反応や制作過程に顕著な深化と変化が見られた。加えて、飯島・久本(2014)の課題として残った「学校教育課程での実施」という点も達成することができた。

キーワード：音さがし、音づくり、造型遊び、音楽づくり、教科間連携、指導者の専門性

## 1. はじめに

小学校教育課程における音楽科と図画工作科の連携授業の事例をみると、主に「楽器づくり」や音の印象を図画として描く「サウンド・スケッチ」などの実践が報告されている<sup>1)</sup>。両教科の「学習指導要領解説」を参照すると、表現するための手法こそ異なるが、その活動目的や指導内容には共通する項目が少なくない(文部科学省2008a、2008b)。とりわけ、児童が想像力を働かせ、自分の表現したい作品をつくる創作活動においては、教科間連携による相乗効果が期待されている。

### 1.1. 本授業にかかわる先行研究

音楽科における「ひびき」を活用する活動、ならびに図画工作科における「楽器づくり」を組み合わせた教科間連携授業の先行研究については、飯島・久本(2014)<sup>2)</sup>で考察したが、これらに加えて今回は従来の楽器づくりを概観した上で、新たに「構成活動」としての楽器づくりなる理論と実践が紹介されていた小島ら(2013)を参照した。

「構成活動」とは「自分の外にある材料のかたちを再構成しながら自分の内の材料、すなわちイメージや感情や思考などを再構成していく営み」<sup>3)</sup>と定義されている。また、「それは一人で行われるものではなく、友だちとの協働の営みにより可能となり(…)楽器づくりの過程で登場してくるいろいろなイメージ、発想、考え、それらに関連付けてまとまりある作品にしていく行為は、異なるものを結びつける力としての「想像力」によってなされるもの」<sup>4)</sup>だという。具体的には、「外にある材料に手を加え、働きかけ、その働きかけた結果を受け止めて内にあるイメージや感情や思考をつくりかえていく活動」<sup>5)</sup>であり、「楽器づくりはイメージの源である想像力を育てるのに有効だという点に注目しました」<sup>6)</sup>と小島は述べている。

飯島(2009)では打楽器を活用した表現活動を考究し、感性(五感を通じた脳へのインプット)と表現(身体=筋肉の動作を伴ったアウトプット)の関係性に着目した音楽教育プログラムを構想・実践した。感性で捉えたことを表現するためには必ず身体性を伴う活動が必要であり、その内容や精密さは興味関心、技術、知識が高まるほどに向上する(図1)。この関係性は教育学のみならず、当時は脳科学の視座からも指摘されていた<sup>7)</sup>。

教育プログラムを構想する際に打楽器の活用が望ましいと考えたのは、打楽器がもつ原始性(構造)、簡易性(奏法)、多種多様性(造型、材質、音・響き)という3つの特徴に依る<sup>8)</sup>。

身の回りのあらゆるものは、叩けば音・響きが生じる。極論すれば、自分自身の身体を含めたすべてのものは打

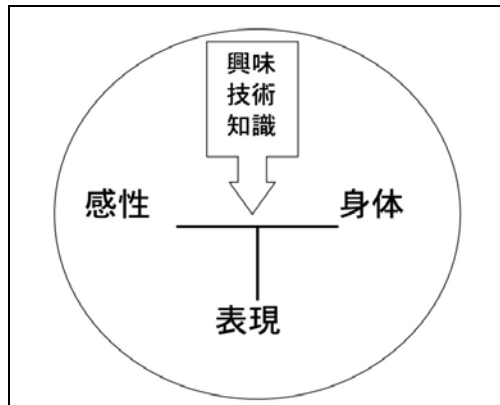
Jun IJIMA<sup>1)</sup> and Megumi YOKOSUKA<sup>2)</sup>: A Study on Expressive Activities with the Cooperation and Continuity of the Subject 'Music' and 'Arts and Crafts' in Curriculum of The Elementary School - Practice of Creative Expression Activities Through Making the "Sounds Visible Instruments" .

<sup>1)</sup> Researcher of the NPO, Association of Corporation and Education

<sup>2)</sup> Koganei Primary School Attached to Tokyo Gakugei University

楽器になりうる。事実、既成楽器を用いずとも楽器としての性質・性能を兼ね備えた「モノ」は身近なところで見つけられる。既成楽器は音楽的な響きを奏でることができるよう加工（設計）されているが、たとえば貝殻や乾燥させた木の実といった自然物そのものでも、鳴らし方（奏法）を工夫することによって既成楽器に劣らない響きを奏でることができる。

このように、飯島（2009）では打楽器が児童生徒の表現活動において適した教材となりうることを示した。



出典：飯島（2009）

図1 感性と表現の関係

他方、飯島・久本（2014）では、図画工作（造型）の専門家との協働によって、「楽器づくり」における楽器それ自体の造型にも創造的な表現活動を加味した実践を紹介した。しかしながら、この実践を社会地域教育ではなく学校教育課程において実施する場合は、1クラス当たりの児童の人数に対して指導者のサポート体制を整えるのが難しいことなどが課題として残った。

この点において、小島ら（2013）では学校教育課程（小、中、高等学校）において類似の授業が実践されており、理論上の先行研究と合わせて参考になった。

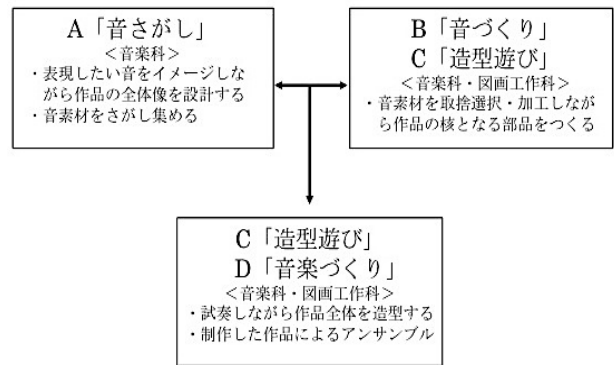
## 1.2. 本授業の構想

筆者らが第4学年を対象に構想・実施した今回の授業の目的および研究仮説は以下の3点である。

- ① 児童が自ら音を生み出す素材を探し、創作活動を行うことにより、身の回りに存在する音・響きそのものへの興味関心を高め、音楽を構成する要素が楽音および十二音階だけでなく、実に多様であることに気づくだろう。
- ② 児童が自ら音を生み出す素材を探し、創作活動を行うことにより、素材と音の響きの関係や、既習の楽器の仕組みを考え、理解を深めるようになるだろう。
- ③ 「音が見える作品」というテーマおよび「造型遊び」

を通して、音・響きにこだわりながら独自の音・響きを探究するようになるだろう。

上記の目的および研究仮説を達成、実証するために、本授業では2教科間にまたがる4つの表現活動を図2のように関連付けしながら実施した。



出典：筆者作成

図2 授業の構成

A「音さがし」では、児童に自分が表現したい音・響きをイメージさせながら作品の造形を考え、設計図を作成する。その際に、イメージした音・響きもオノマトペや図形として書き入れる。B「音づくり」の前半では、音素材と音色の關係に着目させながら作品の材料をさがし集める。後半は活動場所を音楽室から図工室へと移し、音素材を含む材料を作品の部品へと加工する。その際、作品全体の造形を制作する前に、核となる部品（自分がイメージ納得する響きを奏でられる音素材）を優先的に作るように促す。なお、この工程はC「造型遊び」の活動でもある。

また、本授業ではこの工程における試行錯誤を特に重要視し、作品全体の造型を含めて既成楽器に依拠しない独自の発想を児童それぞれがめぐらせながら作業を進められる環境を整えた。たとえば、テーマを「楽器づくり」ではなく「音が見える作品」と児童それぞれが広義に解釈できる名称にしたことや、第1時では児童の発想力だけでどこまでテーマを捉えることができるかを見定めながら、第2時において初めてヒントとなる音素材や自作楽器の資料を参照させた。この順序にしたのは、児童が自ら自由に発想（イメージ）する前にヒントを紹介してしまうと、それらに引っ張られて同じものを作ろうとするだろうとの予測からである。

C「造型遊び」前半の活動で作品の核となる音素材（部品）を制作する目処を立てられたら、後半はAで作成した設計図をたよりに、作品全体の造型および彩色に取りかかり完成を目指す。そして、D「音楽づくり」では児童がお互いに制作した作品による演奏（音・響き）を

鑑賞し合い、それぞれの作品を持ち寄ってアンサンブル活動を行う。

## 2.1. 先行研究との差異

第一に、「校内展覧会」という作品を披露する機会を設けたことである。最終的に第三者の目と耳に触れることを児童に意識させた結果、見た目や耐久性を含めて作品の完成度が高く仕上がった。

第二に、設計図の作成に入る前段階から、見た目も含めて1つの作品(見た目+音で表現)だということを意識させたことである。また、既成楽器には見られない見た目や音・響きでありながらも、既成楽器のような保存性や耐久性をもつ作品を目指すよう促した。

第三に、制作行程を普段から作業をしている図工室で行ったことである。図画工作科教員の専門的な指導や大型電動工具などを使用できる制作環境を整えたことで、制作の開始段階から児童の中に「作品をつくる」という意識を芽生えさせ、使用する材料や工具をイメージしやすくした。

第四に、制作の後半に「音が見える作品」の要となる音素材の選択や扱い方について、映像やパフォーマンスを鑑賞しながら学ぶ機会をつくったことである。

いて一言触れておきたい。それは、児童が自らイメージしたことを具体化するための助言(主に選択肢の提示)や支援(主に造型の技術)、活動環境の整備などは積極的にするものの、それはあくまでも児童の自主性や創造性を引き出すサポート役としてであり、作品の造型や音・響きは児童が決定するように促したことである。

## 2.3. 音と楽器のイメージと設計図の作成

本授業の最初の活動である設計図の作成は、音楽室で行った。児童には「今までに見たことない、聴いたことのない音が出る作品をつくってみよう」と声掛けし、作品を作るためにはどのような材料が必要か。また、どのような造型になるのかをイメージしながら作成することを伝えた。児童がある程度自分のイメージを書き出せ始めたところで、音素材のサンプルやオーシャンドラムなどいくつかの特殊楽器をヒントとして示し、どのような材料からどのような音が鳴るのかを参考にさせた。

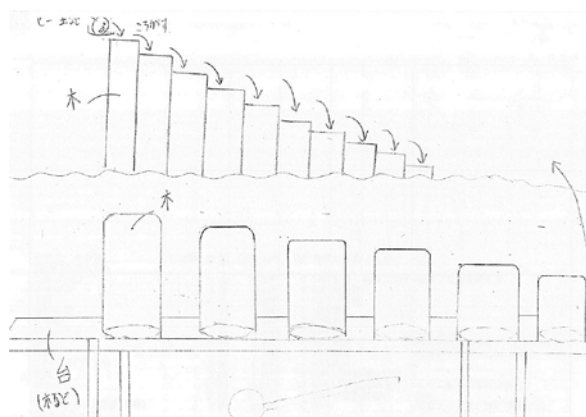


写真1 設計図の一例

## 2. 授業の概要

### 2.2. 授業構成と活動内容

表1に各時間の活動内容と全体の流れを示した。

表1 本授業の構成と活動内容

時数・教科	活動内容	領域
1/7時 (音楽)	設計図作成①「音が見える作品」というテーマに沿って自由に発想する	A
2/7時 (音楽)	設計図作成② 参考資料 (website) 閲覧 参考演奏 (オーシャンドラム)	A
3・4/7時 (図工)	作品制作 (前半)	B・C
5・6/7時 (図工)	作品制作 (後半) : 飯島レクチャー	B・C
7/7時 (音楽)	アンサンブル	D
学校行事	校内展覧会での展示・披露	

次節より児童の活動の様子や写真や感想シートの意見等を交えながら具体的に述べていきたい。

その前に、各活動において指導者が意識したことにつ

### 2.4. 「音が見える作品」の制作 (前半)

制作は図工室で4時間(2時間続きを2回)実施した。前半の2時間は音素材を含む作品全体の材料を選定しながら、設計図をたよりに造型のイメージを具体化した。場所を図工室に移した理由は、電気ノコギリなどの専用の機材がそろっていることをはじめ、これまで児童が図画工作をしてきた教室で実施することで、場所から造型活動に対する積極的な意欲を得られると考えたからである。また、図画工作科の専科教員から専門的な助言や指導を受けられるメリットを最大限活かすためである。

この2時間は設計図をたよりに素材を選別し、作品を構成する各部品の加工が主な作業となった。児童の作業の様子を観察すると、この段階では作品の重要部分である音素材とその他の備品を分け隔てせず、造型(彩色を含めた見た目)へのこだわりが見られた。

他方で、いざ制作を始めると児童の何人かから「思っていた音が鳴らない」「設計図の通りにならない」とい

う声がきかれた。児童が感じたこれらの「ズレ」は、味方を変えれば、適度な助言や支援によって解決策に気づくことで「学び」へと変換しうることであった。そこで、翌週にゲスト講師として打楽器の専門家が来ることを伝え、この2時間では「音が見える作品」の要となる音素材以外の部品の加工や彩色など各自が進められることを制作するように促した。



写真2 前半が終わった時点での作品の一例

## 2.5 「音が見える作品」の制作（後半）

翌週、後半の2時間は児童が各自の素材や部品を机上に用意した上で、制作に先駆けて音素材の扱い方や魅力を伝えることを主な目的としたレクチャーを行った。



写真3 レクチャーの様子

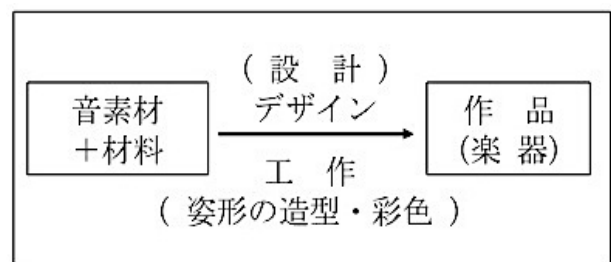
レクチャーは10分程で、以下の3点についてリズムパフォーマンスを交えながら伝えた。

- ① 自分自身がイメージした良い(好き)と感じる「ひびき」を奏でる音素材の見つけ方と加工のコツ
- ② 音素材を「音が見える作品」へと設計(デザイン)するポイント
- ③ 身近な“モノ”を使った打楽器演奏の鑑賞



写真4 持参した音素材と特殊楽器

①の説明には大きさや素材(器と中身)の異なる数種のマラカスをを用いた。それぞれを比較しながら奏することで「ひびき」にどのような違いが生まれるかを児童に実感してもらった。その後、持参した音素材(灰皿、缶数種、紙の箱、貝殻、ビン)と特殊楽器(レインスティック、親指ピアノ、デンデン太鼓)と児童が用意していた音素材(木片、プラスチックの箱)を任意で選び、叩くモノ(パチ)の素材や形状によって奏でられる音・響きが異なることも示した。叩くモノ(パチ)は、編み棒、さえ箸、マレット、竹筒の4種を用意し、音・響きの違いを比べてきかせた。児童からは、「本当だ!」「あっ!音が変わった!」といった明確な反応が見られた。続けて、②音素材を「音が見える作品」へと設計(デザイン)するポイントについて説明した(図3)。



出典：筆者作成

図3 音素材を「音が見える作品」へ

説明に際しては図3を簡易化して板書し、その意図を3分の2まで水を入れた透明の平たいビンを用いて実演した。この水入りのビンは注ぎ口を持って逆さまにし、揺らしながらマレットで叩くとピッチの変化を伴った不思議な水の響きが奏でられる。実演前に、「これは何に見える?」と児童に発問したところ、即座に「飲み物のビン!」と予想していた通りの意見がきかれた。

続けて、「じゃあ、これは楽器に見える?」ときくと、「見えな〜い!」とロ々に反応が返ってきた。早速ビンを揺らしながらマレットで叩くと、その不思議な響きに



驚く声がかかれた。そこで、児童に先程と同じ発問をしたところ、「楽器には見えなかったけれど、楽器だった」という意見が出てきた。

求めていた意見が出たところで、その意見への共感を示しながら、「この“ただのピン”はどうすれば楽器に見えるようになるか？」と問いかけた。児童からは、「色をつければいい」「持ちやすくなるようにフタのところを布で覆う」といった声がかかれたので、再び板書した図を指差しながら、「音素材や材料」を「造型作品（楽器）」へとデザイン（設計・工作）するためのポイントについて口頭で説明した。



写真5 透明のピンを用いたレクチャー

最後に、③の鑑賞教材として世界的なドラマーである神保彰氏が学校生活に関係する身近な音素材＝モノ（筆箱、弁当箱、ピーカー、黒板消し、鉛筆など）を用いたリズムパフォーマンスの映像<sup>9</sup>を視聴し、その後で同類のパフォーマンスを行った（写真6）。



写真6 身近な音素材を使ったリズムパフォーマンス

ここで伝えたかったことは、1) 奏でられる音・響きにこだわりながら音素材を選択すること。2) 叩くモノ、叩き方によって同じ音素材でも音・響きが変わること。そして、3) 音素材の配置と固定の方法である。

1) と2) については、筆者自身が打楽器奏者として

素材＝モノからアフォードされる感覚を大切にしており、つい叩いてみたくなる（アフォードされるような）フォルムや材質の素材を見つけ、叩くモノを選び、試すという一連プロセスに重きをおいている。

また、制作途中の児童の作品は、いくつかの音素材を本体に組み合わせるタイプと土台に配置するタイプの2種類に大別された。そこで、3) として前者の児童には音素材の響きを生かす固定の方法。後者にはセッティングをする度に配置が変わらないように、叩きやすさを含めて最適な位置に固定することの大切さを伝えた。

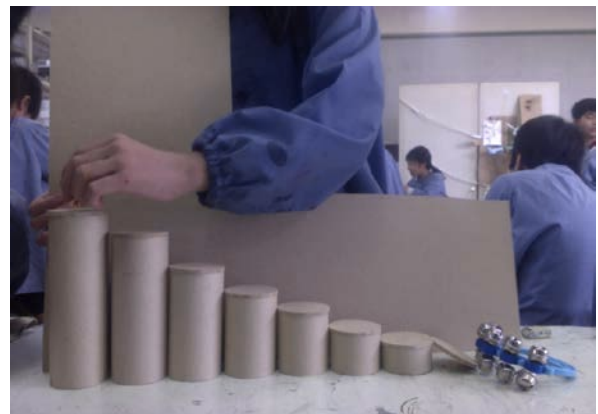


写真7 後半の制作の様子（写真1の作品）

後半の2時間が終わった時に児童が書いた感想シートからは、レクチャーと制作過程での助言によって、前時に感じていた「ズレ」が解消されたとわかる感想（特に下線部）が見られた。

- はじめはゴムを使っていたけれど、かえて、木に石をおとすような音がいいと思ったので、それを生かして作っています。
- 同じ音素材でも、叩く場所やパチを代えることで音が変わった。
- マラカスに いろいろなものをまぜると変になると思っていたけれどキレイになった。
- 設計図ではもっとつまらない楽器だったけど、作っているあいだにアイデアが生まれてきてよくなっていったので、楽しかったです。
- 作ったら音が小さくて、本体に空どうやパチにしんを作るといいというアイデアを先生にもらって前よりよくなった。とても楽しい授業でした。
- 身近にある物でも、かわいい音が出るので、すごいと思いました。
- 先生みたいに水を入れてみたら「ウッドブロック」のような音がしたので、ぼうを選びました。どのぼうがいいか調べてみたらいいぼうが見つかった。



写真8 後半の制作の様子（ししおどし）

## 2.6. 完成した作品に見られた特長

今回は展覧会での展示を視野に入れて、音が鳴るだけでなく、見た目にも楽しめる作品づくりを意識させた。見た目に工夫を凝らそうとすると、作品が壊れやすくなってしまったり、奏でられる音・響きはよいが、材料の形や柄がそのままだったり、両者が両立できる作品を作ることはなかなか難しいようだった。

そのような中で、作品の音と見た目が結びついている、まさに「音が見える作品」となっているものも見られた。写真9の「飛行機しゃみせん」では、三味線のように弦を張り、その長さを変えることによって、飛行機が飛び立つときの音高の変化を表現している。

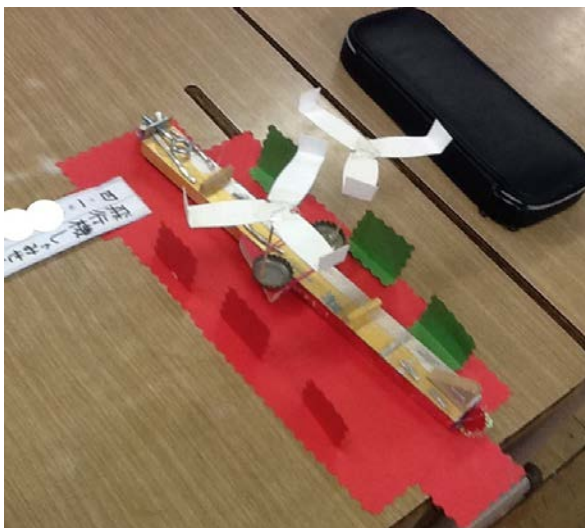


写真9 飛行機を模した作品

## 2.7. 「音が見える楽器」のアンサンブル

作品の完成後、音楽の授業（1時間）を使い音楽室でグループに分かれて「音楽づくり」を行った。この活動を設定したのは、各自が持ち寄った作品で音楽づくりを行うことによって、それぞれの音色や響きを聴き合いな

がら、作品の特徴を生かして創造的な「音楽づくり」ができると考えたからである。また、2月20日から22日まで開催予定の学校行事「なでしこ展覧会」（次節で後述する）において作品を展示・披露するための準備段階でもある。

授業の前半はグループごとに「音楽づくり」を行い、授業の後半でそれぞれの発表を鑑賞し合った。「音楽づくり」の際には、展覧会の全体テーマである「こがねいショー」に沿って、どのようなイメージで演奏するのかを決めるように指示した。

児童は、まず各自の作品の音を聴き合い、音色や響きを紹介し合っていた。そして、演奏のイメージを考えながら、鳴らす順番や鳴らし方などを工夫してつくっていた。グループのイメージには、ショーの「にぎやかさ」や「楽しさ」、「歓声」などがあつた。発表の場面では、盛り上がっているようすを音の大小で表したり、リズムアンサンブルのようにリズムを決めて鳴らしたりと様々な演奏の工夫がうかがえた。

また、中には何度も鳴らしているうちに作品が破損してしまった児童もいた。この経験は、児童にとってどうすれば演奏に耐えうる作品になるかという作品の耐久性について学ぶ機会になったであろう。また、壊れたことによって、アンサンブルに参加するために試行錯誤するうちに、違う鳴らし方に気付く場面もあり、様々な奏法を学ぶ機会にもなったと考えられる。



写真10 アンサンブル活動の様子

今回の活動で、作品の演奏をする児童の様子を見ていて、それぞれが自分で作った「自分の音」を満足げに披露していたのが印象的だった。それは、これまで既成の楽器を演奏しているといとは明らかに違った表情をしていた。そして、最後に全員が一人ずつ自分の音を鳴らしていく活動を行ったときには、既成楽器と違い、見た目から作品の音が予想できないという意外性や、鳴らし方の視覚的な面白さに、お互いの作品の音を興味深く聴き入っていた。

このように「音が見える作品」を用いた「音楽づくり」（アンサンブル活動）を実施したことにより、児童が互



いの音に耳を傾け、その特徴を感じ取っていたこと。そして、自ら制作した作品を自ら演奏することによって「自分の音・響き」に愛着を持ち、自信を持って表現できていたことが成果といえよう。

## 2.8. 校内展覧会での展示・披露

本授業は、学校行事「なでしこ展覧会」において制作した作品の展示・披露を前提にして進めた。展覧会の概要は以下の通りである。

### 1. 全体テーマ

「こがねいショー」

### 2. ねらい

- ・学芸の行事にかかわる活動・経験を通して、相互理解を深め、よさや伝え合う喜びを味わうようにする。
- ・学習成果を広く公開し、教育活動への理解と協力を得る機会とする。

3. 会期：平成 27 年 2 月 20 日（金）～ 22 日（日）

4. 時間：午前 9：00 開場、午後 5：00 閉館

5. 場所：東京学芸大学附属小金井小学校体育館

前述のように、授業の計画段階では展覧会場において実際に演奏を披露する予定でいたが、最終的には少人数によるアンサンブル活動（「音楽づくり」）の様子を事前に撮影し、その映像を作品の展示会場で放映することにした。来場者は映像を通して演奏の様子や音・響きを視聴することになる。披露の方法を生演奏から映像収録に変更した理由は、前節で詳述したグループごとの「音楽づくり」において露呈した作品の耐久性の問題。そして、生演奏を披露するための練習期間を捻出することが、授業時数の制約から難しいと判断したためである。

展覧会当日に来場者の様子を見てみると、演奏の様子を映すテレビの前にベンチを置いたことによって、時間をかけてじっくり見ている人が多かった。また、見ている人が「楽しそう」と口にしており、児童が楽しんで演奏している様子が伝わったようだ。また、作品を並べると意図せずカラフルな見た目のブースができたので、これも様々な素材を用いて作ったゆえの効果であると感じた。



写真 11 展覧会当日の展示ブース

## 3. 授業実践の考察

### 3.1. 得られた成果

本授業を通して、第 1 章で提起した 3 つの目的および研究仮説を考察すると、以下の成果が得られた。

第一に、素材集めの段階から、児童がイメージに合う音・響きを求めて様々な材料を探していたことが挙げられる。その一例として、授業終了後に授業道具の入った手提げ袋を振って「これも楽器です」と言ってくる児童がいた。この何気ない行為と発言こそ、身の回りの音に関心を持ち、様々な音・響きを楽しむことができていた証拠に他ならない。

第二に、制作後半が終了した時点の学習感想から、金属同士を鳴らした時の響きと木の板を鳴らした響きが違うことや、材料を変えると響きが変わることに気づいていた様子が伺えた。さらに、バチ（叩くモノ）の素材を変えると音が変わるなど、既成楽器と共通する部分での理解が深まっていた児童も多数みられた。

第三に、音素材を加工する過程において、様々な材料を試しながらイメージに合った響きを奏でるために試行錯誤している児童の姿がみられたことである。素材の組み合わせや、空洞をつくるために音素材を取り付ける配置を変えたりするなど、自分の求める音に近づけるための方法を各自が考えてつくっていた。制作過程では、「加工がうまくいかない」「思っていた音が鳴らない」という苦言を吐きながらも、試行錯誤（経験）を重ねながら最終的には作品を完成させ、その音・響きを得意気に披露していた様子が印象的だった。

一方、図画工作科としては、よりよい音・響きを探すために様々な材料を用いて試行錯誤したことによって、作品のもとになる材料（素材）を様々な角度から見つめることができたことが成果と言える。

### 3.2. 残された課題

前述した成果が得られた一方で、小学校教育課程にお

ける音楽科および図画工作科の授業として考察すると課題も残った。

本授業の題材のねらいを音楽科教育の指導要領に則していえば、「身の回りの音、身近な音に関心を持ち（関心・意欲・態度）、既習の楽器には無い、今までに聴いたことのない音をつくること（創意工夫）。つくった音で音楽づくりをすること（技能）。そして、websiteの映像やゲスト講師のパフォーマンスから、素材と音色の違いを味わって聴くこと（鑑賞）」である。

完成した作品や感想シートを振り返ると、児童はその過程で様々な試行錯誤をしており、「学び」の機会はいくつも設定することができた。しかし、結果的に時間内で完成できなかった児童がいたこと（教師の支援不足、教育課程における時間的な制約など）。また、それぞれの活動を通して児童が気づいた「学び」を全員で共有し、意識的に「今日の授業ではこれを学んだ」と、それらの「学び」を明示しきれなかったことが課題である。

一方、図画工作科としては、音を鳴らすことに児童の意識が向いたため、結果として見た目の工夫があまりできなかった児童や、イメージを作品にするのではなく素材の元の形に装飾を凝らすことに終始していた児童がいたことが課題である。作品の視覚的な見た目のよさと、聴覚的な音・響きのよさを両立させることは、予想していた以上に難しいことがわかった。

しかしながら、多くの児童が音・響きにこだわり続けたという意味では、音楽科からすれば大きな学びや喜びを得られた活動だったと言えよう。その証拠に、見た目にもあまり工夫が見られなくても展示会に出したいと申し出てくる児童が多かった。作品の見た目以上に、試行錯誤を重ねながら作った音・響きが奏でられる作品であるということに、児童たちが自信を持てた結果であるとも推察できる。

#### 4. おわりに

以上で述べてきたように、本授業にはいくつかの課題が残されたものの、音・響きそのものに対する興味や感性を育む機会になったと自負している。今や、学校教育課程の音楽科においては学校行事等との兼ね合いもあって表現活動の大半を合唱が占めている。

子どもたちには早い時期から、自分自身にとって「よい」と感じる音・響きと出会い、体感し、多様な音・音楽を聴取する感性と幅広い価値観を体得してもらいたい。また、日本の伝統的な生活文化や芸術、また日本人の感性に音・響きが与えてきた影響は大きく、諸外国の著名な音楽家や教育者からも広く注目を集めてきたことも特筆に値する<sup>10</sup>。とりわけ21世紀の国際化社会を生きていく現代の子どもたちには、日本人としての価値

観やアイデンティティを保持する意味でも重要な教育であると言えよう。

この点について、日本を代表する作曲家の武満徹（1930-1996）は20年前（1995年）に次のような警鐘を発している。

「いま私たちは、技術<sup>テクノロジー</sup>の援用によって、誰もが手軽に楽器を演奏し、その音色までも合成することができる。このこと自体は考えるまでもなく素晴らしいことだが、出てくるものは、なぜか、似たりよつたりのものばかりである。それは、結局、与えられた材料の枠のなかで、いかに上手にマニピュレート（操作）するかということがうた（音楽）の主目的になってしまっていて、音楽にとって最も大事な、（自発的に）うたい出し、聴き出すという<sup>アクティビティ</sup>能動性を忘れてしまっているからである。いや、忘れさせられている、と言いかえてもいい。

巨大な商業主義の力で、私たちの感受性が開発されたのも事実だが、同時に、その枠組のなかに閉ざされてしまったことも、また、否めない事実である。だがこの矛盾はそう簡単には解消しないだろう。資本主義的な市場経済の社会では、こうした<sup>いたち</sup>鼯ごつこのような悪循環は、あるいは避けようもないことなのかもしれない。」<sup>11</sup>

武満が発してきたこれらの警鐘は、インターネットが世界を覆い、いつでもどこでも音楽に手軽にアクセスできる21世紀の今日において、ことさら重要であると感じている。

本論のような音・響きそのものを扱う活動を学校教育課程で実施するのは、先述した課題からもわかるように簡単なことではない。しかしながら、活動全体を通して子どもたちは自発的にイメージを膨らませ、試行錯誤しながら手を動かし、お互いに協力しながら活動が続いていた。そして何よりも、いつも笑顔で活動していたことが印象的だった。課題は残されているが、今後は中学校教育課程においても美術科や技術科との連携を図った授業を構想しつつ、実践研究に寄与していきたい。

<sup>1</sup> 「楽器づくり」の事例については、橋本（2010）など。「サウンド・スケッチ」の事例については、井上（2011）などを参照されたい。

<sup>2</sup> 飯島・久本（2014）pp.43-45

<sup>3</sup> 小島ら（2013）p.14

<sup>4</sup> 小島ら（2013）p.2

<sup>5</sup> 小島ら（2013）p.14

<sup>6</sup> 小島ら（2013）p.3

<sup>7</sup> たとえば、2007年に行われた日本音楽教育学会第38回大会において、脳科学者の小泉英明は次のように述べていた。

「脳科学と芸術を考えると、脳の進化というのを考えなければいけないんですけども、情動というのは進化の中で古い皮質と、最後に進化してきた新しい皮質との相互作用から生み出される、これが基本的な考え方です。（中略）一番外側が



理性の脳、知の脳であって、内側が情動、情意の脳、両方が作用しているわけですが、この内側の所を十分に注意しないと何事も始まらないということです。

ですから知育だけ一生懸命やっても図書館みたいに知識はいろいろと豊富になるでしょうけれどもやる気が起こらなければ何も始まらないわけです。そのやる気、志、passion、それを育むことが重要です。これは芸術の非常に重要な働きと考えます。」日本音楽教育学会 (2007) p.27

<sup>8</sup> 飯島 (2009) p.20

<sup>9</sup> アニメ「となりの関くん ED『Set Them Free』」を神保彰本人がやってみた (メディアファクトリーTV 公式 YouTube チャンネル)

<https://www.youtube.com/watch?v=DYfLAVVD8Nk> (最終閲覧日: 2015年1月31日)

<sup>10</sup> たとえば、本授業とも関連の深い「サウンド・エデュケーション」を提唱したマリー・シェーファーは、1984年に初めて日本を訪れた際に、日本の伝統的な生活文化に触れ、茶の宗匠は釜で音楽を奏で、庭師は水の戯れに耳を心地良く響かせるため、庭に水車や共鳴壺を仕掛けるといったことに深い感銘を受けている。そして、このような日本人の感性がどのように培われたのかを考えているうちに、ガラスではなく和紙を使った壁と窓 (障子や襖) がある家に住んでいるために、耳の意識が敏感にはたらいっているのだろうという結論に至ったと述べている。シェーファー (1986) p.10

<sup>11</sup> 「毎日新聞 (夕刊) (1995年12月14日)「忘れられた音楽の自発性」: 武満徹 (1996)『時間の園丁』新潮社 pp.99-100

<sup>12</sup> 一般的に音や音楽は受け身で「きく」ものだと思われることが多いが、自身が本当に「ききたい」と思う音に対しては、意識せずとも耳に入ってくる響きを聴こうとする。すなわち、自分の感性に合う響きを探す自発的な営みが「きく」ということである。しかし、今日では多くの人々が、自覚の有無に関わらず、騒がしい生活を余儀なくされている。そのため、日常生活の中で周囲の音や音楽に対して「耳を澄ます」という機会 (時間と場) は老若男女を問わず減っている。「耳を澄ます」とは、自分自身の周囲で今どのような音が生じているかを感じ、その音を自分自身がどう感じているのかを「判断」する営みであるといえる。飯島 (2009) pp.6-7

#### 引用文献

飯島淳、久本綾 (2014)「小・中学校教育課程における表現活動に関する研究—ものづくり・音づくり・音楽づくりを連携した創造的表現活動の試み—」藤川大祐 (編) 千葉大学大学院人文社会科学部プロジェクト報告書 第277集『社会とつながる学校教育に関する研究(2)』、pp.43-53  
<http://ace-npo.org/fujikawa-lab/other.html>

飯島淳 (2009)「人と人を結ぶ音楽教育の構想—打楽器の「響き」を活かした音楽教育を中心に—」千葉大学大学院教育学研究科修士論文

井上朋子 (2011)「音楽科と図画工作科の横断的プログラムの構築」: 日本音楽教育学会 編 (2011)『音楽教育実践ジャーナル Vol.8, no.2』日本音楽教育学会事務局、pp.54-61

日本音楽教育学会 (2007)「第38回大会 第2部 パネルディスカッション 感動を脳科学する」『音楽教育学 Vol.37, no.2』日本音楽教育学会事務局、pp.27-33

小島律子、関西音楽教育実践学研究会 (2013)『楽器づくりによる想像力の教育: 理論と実践』黎明書房

シェーファー、マリー (1986) 鳥越けい子 他訳『世界の調律—サウンドスケープとは何か—』平凡社

橋本龍雄 (2010)「「音」を単元とした音楽科と図画工作科との合科による協働授業の試み—「土笛づくり」を中心に—」『日本学校音楽教育研究実践学会紀要 Vol.14』日本学校音楽教育実践学会、pp.197-198

文部科学省 (2008a)『小学校学習指導要領解説図画工作編』

文部科学省 (2008b)『小学校学習指導要領解説音楽編』

#### 謝辞

本論の授業実践において、東京学芸大学附属小金井小学校の山本真央さんには造型活動の専門家として実技指導のご協力をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。